

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

黒田壽郎

イスラームの構造

書肆心水

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

Toshio KURODA

The Structure of Islam: Tawḥīd, Sharī'ah, and 'Ummah

© 2004

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

イス  
ラーム  
の  
構造  
目次

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 序章

イスラームの三極構造 ..... 19

—— タウヒード・シャリーア・ウンマの有機的連関 ——

タウヒード 21

シャリーア 25

ウンマ 27

聖典クルアーン 32

イスラームの社会形成の歴史 ..... 38

預言者ムハンマドと正統カリフの時代 38

ウマイヤ朝・アッバース朝の時代 44

為政者とシャリーア 45

近現代とシャリーア 48

## 第一章 タウヒード イスラームの世界観

タウヒードとは何か ..... 57

等位性、差異性、関係性の三幅対 57

権威主義の否定と水平的構造 59

六信五行 61

クルアーンとスンナ 63

タウヒードの言語学的原義 67

等位性……………70

ユダヤ教との比較 71  
キリスト教（精神・物質二元論）との比較 76  
道徳論ではなく存在論としての平等 80

差異性……………83

カラーム神学の原子論 84  
モッラー・サドラーの〈存在の優位性〉論 87  
同一律の忌避 91  
差異性のもつ政治的側面 93  
差異性のもつ経済的側面 96

関係性……………100

アラベスク模様の思想性 105  
人間関係と男女の関係 111  
家族と親子の関係 116  
スピノザ哲学とイスラーム 121  
個人の優先性 130

## 第二章 シャリーア イスラームの法（行動規範・社会経済運営）

シャリーアとは何か……………137

シャリーアの二重構造——意識にとつてのシャリーア、公的次元のシャリーア 139  
イスラーム法の史的厚み 145  
シャリーアの成立と展開過程 149



開かれたシステム	157
善悪の五つの範疇（義務、推奨、無記、忌避、禁止）	160
五行（宗教的義務） <small>イベラダート</small> .....	163
信仰告白と礼拝	163
断食	171
喜捨	174
巡礼	186
社会関係法と私的関係法.....	197
社会関係法（ムアーマラート）	200
私的関係法（アフワール・シャフスィーヤ）	204
女性の権利と男女の平等観	211
遺産相続のシステム	218
刑罰	221
心性——法で語り尽くしえないもの	223
第三章 ウンマ イスラーム共同体	
ウンマとは何か.....	235
現実のウンマと理想のウンマ	236
文明の状態を映すストーリー	239
ウンマ誕生の背景——ジャーヒリーヤ（無明）時代の状況	243
理想のウンマ——預言者と正統カリフの時代.....	249

## 終章

民衆とカリフの関係性	255
〈原理主義〉と〈原点回帰主義〉	261
理想のイスラーム共同体を挟む二つの反面教師の歴史	266
ウンマの多層性	270
民衆の優位性	272
国家の時代におけるウンマ	275
為政者とウンマ	275
国家権力とウンマ——アッバース朝以降	284
権威と権力の相違に基づく社会構造の二層化	290
イスラームの都市空間	295
差異の思想と都市のかたち——中庭式住宅と蜂の巣状の町	295
四つのタワーライフ——都市をつくる社会的ネットワーク	299
スーク(市場)	306
西欧化とイスラーム世界	327
イスラーム世界の自己主張	335
資本主義に抗する社会	337
二十世紀後半の中東世界と世界史	347
世界史の今を映す鏡、ハレスティナ	358
付録　イスラーム研究の道程	371
あとがき	394
索引	412

SAMPLE  
Shosha Shinsei.com

イス  
ラ  
ー  
ム  
の  
構  
造

タ  
ウ  
ヒ  
ー  
ド  
・  
シ  
ャ  
リ  
ー  
ア  
・  
ウ  
ン  
マ

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

序  
章

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 序 章

近来さまざまな観点からイスラーム、ないしはイスラーム世界にたいする関心が高まっている。それまで一つのブロックとして認識されてこなかった中東、イスラーム世界が、一つの纏り<sup>まと</sup>として意識されるようになったのはごく最近のことであり、それはおそらく外部の観察者の目には極めて衝撃的であった、イラン・イスラーム革命を契機としてであろう。西はモロッコから東はインドネシアにまで拡がるイスラーム世界には、現在でも十数億のムスリム（イスラーム教徒）が存在しているといわれている。彼らの存在はこれまで、国際政治の舞台で大きな役割を果たすことがなかったため、ほとんど無視されてきたが、状況が様変わりを示したのがイランにおける政治的变化である。この変化は、政教分離、脱宗教、合理的精神に立脚する民主的統治の充実といった、現代の政治的發展のための図式に反するものとして、一般に〈中世帰り〉の、時代錯誤の代物と評価され、現在も基本的にどのように評価され続けている。民主主義的資本主義、ならびに社会主義といった現代の二つの政治的潮流の、いずれにも属さないこのイスラーム革命の路線は、政教分離、脱宗教という観点からみて、現代の政治的潮流に根底から逆らうものであり、先ずはこの点から人々の強い拒絶反応の対象となっている。

ところで肝心なイスラーム、ないしはイスラーム世界の問題であるが、過去において高度な文化的水準を保った事実については、人々の間で若干認知されてはいたものの、この世界の近現代における衰退は著しく、とりわけ西欧による植民地支配の後には、国際的舞台においてほとんど発言権を持ち

合わせなかつたため、長らく積極的な知的関心の外に置かれてきた。したがってイスラームという教え、その信者たちが多数派を占めるイスラーム世界に関しては、人々は常識の次元で充分な知識を持ち合わせていなかったというのが実情である。この点は長い研究の伝統をもつ欧米においても、大差はないといえるであろう。この教え、世界についての、細部にわたる諸事情に関して、専門家たちの間には精密な情報が獲得され、蓄積されつつあるものの、この異質の文明をめぐる大枠の認識については、人々の自文化中心主義が突出して全体的な構図を読み損なっているという、基本的な問題を抱えている点は否み難い。この自文化中心主義は、文化の多元性について一般に意識の低い西欧世界の、例えばオスマン朝敵視、蔑視の尾を引いて、一般大衆の常識の次元で著しいのである。

このような状況の中でイスラーム、ないしはイスラーム世界について言及することには、多くの困難が存在する。とりわけこの世界ではイスラームを信ずる者が圧倒的多数であるにもかかわらず、国政レベルではイスラームの路線を採る国は比較的少ない。アラブ社会主義、バアス主義等イスラームとは異なる原則で政治が行なわれている改革派の国々があり、最も多数のムスリムを抱えるといわれるインドネシアにおいても、国法をイスラーム化しようと試みる党派は依然として少数派であるといった有り様である。イスラームを国是とする国々としては、サウディアラビアやモロッコといった王制の諸国が挙げられるが、二十一世紀に及んでなお権威主義的なこの制度にたいする固執は、流石に諸隣国の民衆には人気がない。ことほど左様に登場当初は中央アジアからスペインまでを統べる大

序 章

帝国を築き上げ、それを長らく運営した歴史を持つイスラームの政治的力は、まさに風前の灯火といった状態にあつたのである。こと政治的局面に関しては、この世界はイスラーム的とはもはや呼びえないような、四分五裂の有り様であつた。外部の観察者が、イスラームはすでに過去のものと判断するのも、故なしとしなかつたのである。

そのような情勢の下で突然のように発生したのが、イラン・イスラーム共和国の誕生（一九七九年）である。この革命が外部の世界に及ぼした衝撃はもろろんであるが、それはとりわけイスラーム世界に大きな影響を及ぼさずにはいながつた。この事件が民衆に及ぼす波及力には著しいものがあり、それを押さえ込むためにさまざまな国際的力学が働き、八年にわたつたイラン・イラク戦争の結果、現在ではその影響力はかなりの程度封じ込められている。しかし共通の宗教的、文化的伝統を持つこの世界において、イスラームの伝播力は伝導的ではなく、輻射的に作用する。熱源は、地を這うようにではなく、空間を飛び越すようにエネルギーを移動させる。この間かなり成功し、安定した社会主義を誇るアルジェリアで、強力なイスラーム政党が躍進し、その結果国内で深刻な政治闘争が展開されてきた。その他各地でイスラームへの回帰の波が巻き起こつたが、特筆すべきはトルコの最近の変化であろう。第一次大戦の敗北以後トルコは、ケマル・アタチュルクの手によつて逸早く脱宗教化の路線をとり、ほぼ一世紀にわたつてこの道を突き進んできたが、最近の総選挙によつてイスラーム政党が大勝するという番狂わせが生じているのである。この国を取り巻く微妙な国際関係、軍部と深い

つながりを持つ旧勢力との関わりで、この国のイスラーム化の行く手には今なお多くの難題があり、その将来は依然として未知数である。しかしこれまで百年に近く圧倒的な力を誇っていた世俗主義の政党が、総選挙において惨敗している事実は、この国でも確実に何事かが進行していることを示すものであろう。

ありそうでなさそうであり、同時になさそうでもあるイスラームの力を分析し、この世界の将来を予測するためには、政治的な現象面のみ配慮するばかりでは充分ではない。やはりこの教えの本性そのものと、その文化的、社会的な機能について検討を行なうことが不可欠なのである。すでに指摘したように、政治的側面におけるイスラームの力はすでに退化していることは明らかであるが、その衰退と反比例して国家レヴェルのすぐ下では、イスラーム性はむしろ次第に強化されつつあるのである。この世界における上部構造の退嬰と、下部構造の強化は、現在のこの世界に認められる顕著な特徴であるが、このような事態の解明のためにも先ず質さなければならぬのは、これまでもつばら細部に拘泥する専門家たちの多くが不問に付してきたが、一般の人々にとって最も大きな関心事である、次のような初歩的な問いである。「世俗化の潮流が一般的である現在に至ってもなお、人々の心を惹き付けてやまないイスラームの魅力とは何か」。

七世紀の前半にアラビア半島の一角で誕生し、その後瞬くうちに勢力を広め、十四世紀の長きにわたって信徒の数を増やし続け、現在においてもなお十数億の信者を持つといわれるこの教えは、改宗

## 序 章

者の数が少ないことで知られている。世界史の中には、短期間に行なわれた勢力拡張のケースとして、アレクサンダー大王の東征、モンゴルの拡張等、例が多い。しかしいずれの場合も、中央の力の凋落に伴って、すぐにその勢いは衰退している。ただしイスラームの拡大の場合は、その限りではないのである。登場当初のエネルギーが漲った状態における、教勢の拡大、維持については論外であるが、その後の著しい衰退の状況において、宗旨変えを試みる人間が続出したとしてもなんの不思議もない。事実西欧の植民地主義者たちは、この世界の衰退は民衆が、この愚昧な教えを性懲りもなく信奉している故であると、声高に繰り返して立てたものである。しかしその反面この世界をよく知っていた著名な高等弁務官は、彼らがこの奇妙な書物を信奉している限り、われわれには為す術がないと告白しているのである。この奇妙な書物とは、イスラーム独自の聖典であるクルアーン（コーラン）に他ならないが、この教えを信ずる、つまりムスリムとなる、ないしはムスリムであるということは、とりもなおさずこの啓典を生きたための導きの書とすることに他ならない。ところでこの書物には、時代の変遷を通じて変わることなく人の心を打ってやまない、どのような衝動力があるのであろうか。

イスラーム、及びイスラーム世界の研究の伝統が浅いわが国においても、われわれが問題とする主題についての関心が高まって以来、数多くの著作、論考が出版されている。それらの研究の中には、すでに上述の問いの解答になるような事柄が多く散見されるが、本書はもっぱらこの問題に論議を集中して分析を進めていくことにする。筆者は長らく多くの人々から、この点を明快に説明する研究書

の紹介を求められてきたが、なかなかそれに相応しい著作を見つけ出すことができなかった。それには多くの理由が挙げられる。この教えが対象としている事柄がきわめて広範、多岐にわたっており、同時にそれを受け入れたムスリムの対応も複雑、多様であり、なかなか核心を突いた論議が行なわれ難いという、対象の広がりそのものにも原因がある。しかしそれ以上に問題なのは在来の研究が、この教えの核心部分について十分な検討を行なっておらず、その成果が不十分である点である。本書はそのような欠陥を補うために、この核心部分に焦点を当て、それをまったく新しい視角から解明する試みである。それに先立ってここでは、既存の研究の問題点を指摘しながら、この試みの概要を簡単に説明しておくことにする。

これまで〈イスラーム〉というタイトルを冠しながら、その実ほとんどイスラームについて論じていないような著作が数多い中で、あとう限り問題の核心に迫る議論を展開するつもりであるが、それに際して先ず冒頭からイスラーム理解の中核部分の構成について紹介しておくことにする。よろず物事には根幹に当たる部分と、そこから派生する枝葉の部分があるが、イスラーム論議の多くが、枝葉の部分の説明に労を割き、その間に焦点を見失ってしまう傾向があるため、本書では先ず事の根幹についての概略の説明から始めることとする。

序 章

イスラームの三極構造

——タウヒード・シャリーア・ウンマの有機的連関——

天啓の書クルアーンを基軸にするイスラームの教えは、基本的に三つの柱、ないしは極からなり立っている。筆者がイスラームの三極構造と呼ぶこの教えの基本構造は、以下に指摘するような三つの極からなっている。つまり（一）固有な世界観である（タウヒード）、（二）行動の規範となる（シャリーア）、（三）共同体のありようを示す（ウンマ）の三つであり、イスラームの特性はこれらの三つの極が作り出す磁場において生み出され、そのような場において機能するといえる。そのさい重要な点は、一々の極についての正確な認識もさることながら、それぞれの極が発する磁性が他の極の発するそれと交感、反応し合う関わりについての認識である。この点の詳細については後の本文において、それぞれの極に関して独立した章を設けて論述するので、それに当たって頂くとして、要はここで挙げられたそれぞれの極は、単独にそれだけで捉えられるのではなく、他との関連において理解されねばならないということである。ところで既存の研究が抱えている問題は、イスラームの基本的認識に不可欠なこの三極構造を形作る一々の部分について充分、かつ正確な分析を行なってこなかったばかりで

はなく、さらにそれらが互いに関連し合いながら機能する、総合的な働きについて検討することを怠ってきた点にある。複雑、多岐にわたっているが、同時にきわめて統合的な性格の強いこの教えの、最も肝要な部分が蔑ろにされたままでは、その本性の理解はしよせん不可能であるが、以下にそのような不備の実態を明らかにして、読者の便に供することとする。イスラーム、ひいてはイスラーム世界に関する言説には、重大な欠陥、ないしは欠損が存在している訳だが、その内実を予め検討しておくことは、読者の理解にとつてきわめて重要であろう。とりわけこの種の欠損がたまたまの失敗、不注意の結果ではなく、ある種の一貫した意図によつて生み出された気配が濃厚であるため、欠損の実情を検討しておくことは、なおさら重要なのである。

イスラーム、あるいはイスラーム世界をめぐる言説の顕著な偏向性についてはすでに、E・サイードが『オリエンタリズム』や『イスラーム報道』といった著作において優れた指摘を行なっている。とりわけ彼は『オリエンタリズム』において「現代西欧の作家、芸術家たちが描いてきたオリエント、つまり中東世界の現実が、いかに仮想のものであるかを摘出し、彼らの言説の組織的な虚構性を暴き出している。この種の言説の体系が成立するためには、その背後に一貫した態度、姿勢が存在しなければならぬが、それをサイドの言葉を借りて一言で要約すれば、「対象の存在をその不在で説明する」という手法である。具体的な現実から遊離した、ロマンティズム、エクゾティズムの衣を纏った視線は、対象の〈不在〉をもって実在めかしたものに飾り立てる。これが完全にフィクションの世

## 序 章

界に留まっている限りにおいては、さして問題ではない。しかしそれを通じて現実のありようが付度された場合、もたらされる誤差は深刻なものである。ところでサイドが炙り出したのは現代西欧の著述家たちの言説の虚構性であったが、これと同じ事態は、西欧の学術研究の場合にも形を変えて存在しているのである。この場合の基本的な手法も、上述したような「存在を不在で説明する」という姿勢と共通しているが、より具体的にいうならば対象の存在を、核心的な部分を省略したまま説明する姿勢と要約することができるであろうか。あらゆる対象は、それを構成する多くの部分を持っている。例えば百の構成要素があるとする場合、九十五の要素を客観的に取り上げ、残りの五つの部分を省略、ないしは変形して説明するのである。この場合九十五という大きな部分についての正しさのゆえに、一般の人々は論述に疑いの目を向けぬようになり、それに乗じて付け加えられる五つの省略、変形に誑かたぶらかされてしまうことになる。省略、変形された部分が核心的であればあるだけ、もたらされる誤差は大きいのである。

## タウヒード

三極構造のそれぞれの極は、イスラームの理解に当たつての最も中核的な部分であるが、省略の具体的な一例として最初に挙げられるのは、イスラームの基本的な世界観である（タウヒード）の軽視である。この世界ではしばしば、「イスラームとはタウヒードの教えである」という指摘がなされてお

り、ここにこそイスラームのイスラームたる所以があるといわれている。事実これはイスラームそのものの本性を知るためだけではなく、姉妹宗教であるユダヤ教、キリスト教とこの教えの主張の相違を明らかにするためにも、絶対に避けて通ることのできない主題である。しかしこの問題は、とりわけ欧米の研究者の間では、ほぼ意識的に回避されているのである。核心部分についての考察を欠いた説明に、この実質に迫る成果が期待されるはずがないことは明らかであろう。このような無視の背景には恐らく、後に指摘するように、この問題に関する言及が、研究者たち自身の側の宗教的立場に差し障りをもたらし兼ねないという、特殊な危惧があることも想定される。姉妹啓示宗教の最終版であるイスラームの世界観は、当然先行する諸宗教に対抗しうるだけの、積極的な主張を備え持っている。不用意にこの問題に立ち入ることは、自分たちの宗教的立場を損ない兼ねない危険性を孕んでいるのである。

本文においてその内容を詳しく論ずるが、タウヒードとはさまざまな事象を（一）を介して理解する原則であり、〈二化の原理〉と訳されるものである。この原理を神に適用すれば一なる神という、唯一神論の基礎がえられる。ただしこの原理は、固有なかたちで現実世界のありようにも適用される。この原理を厳密に適用した場合、例えばキリスト教の三位一体の議論は基本的な矛盾に曝されるのである。タウヒードの論理からすれば、地上に存在するものみならずの外に存在の原因を持ち、自らの外に存在因を持つものは、神の被造物としてすべて生成消滅するという点で共通している。すべて

## 序 章

の存在者はそのようなものとして同じ性質を共有しており、何一つとして例外はない。イエス・キリストを例外視し、神の子として特権化することは、タウヒードの存在論にもとるものであり、彼の人格化こそキリスト教の存在論の枠組みを危うくしているものに他ならない。イスラームが徹底させているタウヒードの原理は、このように神の子といった考えを根本的に否定するが、ここにこそイスラームの真骨頂が存在する。三位一体論とタウヒード論の質的相違は、さらにキリスト教世界とイスラーム世界の文化、社会的相違と密接に関わっているのである。

タウヒード論の徹底化は、「一化の原理」が、神の唯一性にのみ適用されるのではなく、それが存在界の分析にも活用される契機となっている。万物は同じ神の手になっているため同根であり、それゆえすべて等位にある。そしてそれらは同時にすべて差異的であり、さらに互いに密接に関連しあっている。タウヒードの論理は、万象の等位性、差異性、関係性という三原則を徹底させ、それに基づいて特徴あるイスラームの現世観を作り上げているのである。現世解釈の基本をなすこれらの三原則は、信徒たちの思想ばかりではなく、彼らの実践的行動にも色濃く反映されているが、その第一の特徴は後に指摘するような、万人の平等を説く徹底した民主主義的主張である。ところでこの種の核心的な問題の無視は、宗教としてのイスラームの理解の妨げとなるばかりでなく、イスラームの伝統の正しい解釈の道を閉ざすことになる。このようなイスラームの特性の無視は、直ちにイスラーム文明の固有性の軽視につながっているが、その結果この文明はそのもの独自の内発的観点から分析されること

なく、特徴を欠いた、貌かおのない文明として表層的に取り扱われ、偏向、歪曲が忍び込みやすい、他者の視線、尺度で付度されるばかりなのである。

タウヒード研究の不備は、このような観察者の側の省略の手法と同時に、イスラーム世界内部での議論の流儀にも問題があるといえよう。タウヒードは、彼ら自身にとつて最も重要な主題であるだけに、この問題については時代、地域を問わずほぼ無数といつてよいほど多くの著作がものされている。ただしイスラーム世界の活力が低下するに従つて、タウヒードの論議は神の在り様の問題に集中し、〈神の唯一性〉の議論にのみ焦点が当てられるようになってきた。タウヒードとはアラビア語の原義によれば（一に帰す）こと、つまり一を基本に考えることに他ならないが、それを遥か高みにある神の唯一性の分析に限り、この原理を現実世界の分析に応用しなかつたことに、この世界の知的退嬰が認められるのである。さらにこの問題について論ずるこの世界の知識人の論議は、同じ文化圏に属する読者を対象としており、互いに周知の主題を取り扱っているため外部の者にとつては省略が多く、直接紹介しても意義が少ないという事情もある。しかしいずれにせよイスラームのイスラームたる所以を、最も明らかにする主題についての検討が割愛されたままでは、対象についての充分な理解は期待されえないことには疑う余地はない。イスラームが啓示宗教の最終版であるとされているのが、このタウヒード観の徹底のゆえであるといわれているが、この点一つをとつてもこの問題の省略が、いかに真実を隠蔽する役割を果たしているかは理解に難くあるまい。

## シャリーア

タウヒード論の省略に次いで問題なのは、〈シャリーア〉の軽視である。一般にイスラーム法と解釈されるこの主題をめぐっては、欧米のオリエンタリズムはこれまで長らく、学会のとある大家の見解に基づく定説として、きわめて初期の時代からそれが具体的な歴史の展開に、ほとんど何の役割も果たしてこなかったとしてきた。その結果イスラームの歴史、社会の分析に当たって、シャリーアが実際に果たしてきた役割が完全に無視され続けてきたのである。ごく最近になって豊富な地方史研究の素材に基づいてこの誤りが鋭く指摘され、誤解の雲は晴らされた感があるが、ウエーバーまでも巻き込んだこの種の説の強い影響は、未だに深く爪跡を残したままなのである。

一般にイスラーム法と訳されているシャリーアとは、アラビア語の原義で〈水場への道〉という意味であり、要するに信徒たちが生きるに当たつての〈道標〉であるといえる。砂漠の民にとって水の在り処を弁えていることは、生死に関わる重大な事柄であった。個々のムスリムは生きるに当たり、クルアーン等の典拠に示された規範を、水場に至る道さながらに実践的な活動の導きとしているのである。そのようなものとしてシャリーアは、ムスリムが存在する限り常に彼らによって参照され続けるものに他ならない。ところで過去、現在を問わず、すべての信者たちの導きの源となるものが、歴史の展開に少しも貢献しなかったなどということは、およそありえないことであろう。ところでシャ

リーアという表現にはいくつかの意味が存在しているが、ここで重要なのはすべての信者にとっての道標としてのシャリーア、つまり信者個人の〈意識と関わる〉シャリーアと、具体的な〈法的規範〉という意味でイスラーム法と解されるシャリーアの二つである。絶えず個人によって参照される生の道標としてのシャリーアと、すでに社会的な形をとったシャリーアといった両者の間には、質的に大きな隔たりがあるが、ごく最近まで蔑ろないがしにされてきた前者こそ一義的なものであり、それとの対比においては、イスラーム法と呼ばれるものはむしろ副次的なものに過ぎないのである。あらゆる専門用語に関して、解釈の厳密さを期す上では、先ず原義の検討から始めるべきであるが、一義の意味でのシャリーアが蔑ろにされてきたことは研究上の大きな盲点に他ならない。なぜならば個人の意識に関わるシャリーアは、その本性上現在においても十数億の人々の生の模索と関わっており、それがもたらすエネルギーと可能性には、計り知れないものがあるのだから。ただし最近に至ってようやくシャリーアのこの側面の重要性に光が当てられ、例えばイスラーム法成立をめぐる論議にも、大きな変化が生じている。

さらにいわゆるイスラーム法と名づけられるもの自体の分析、解釈にも依然として多くの問題が残されたままである。通説によればイスラーム法は、ごく初期から歴史的な役割を果たすことを止めたこととされてきた。しかし例えば遺産相続の問題一つをとっても、その規定は登場当初から現在に至るまで、ほぼ変わることなく一貫して施行され続けている。財の集中を回避し、あたう限り多くの相続権

## 序 章

者に遺産を分配するこの法制度は、その他の種々の規範と相俟ってイスラーム世界の経済活動に、一定のパターンを形成していることは紛れもない事実である。このパターンはこの世界に、欧米世界で進行中の、資本の無限増殖を可能にするかたちの資本主義を成長させなかった基本的な要因なのである。ことほど左様に、イスラーム法は過去においても現在も、この地域の政治、経済活動に大きく関与しているが、この種のアスペクトからの歴史的分析は、ようやく端緒にいたばかりであるといえよう。それに当たって重要なのは、シャリフアがタウヒード論の内容と密接に関わっているという認識である。シャリフアとは、共同体の内部で万人にたいする公平を、どのような規範を介して実現するかといった、タウヒードの世界観の社会的実践のための法的道標であり、私的な問題から公的な事柄まで広範囲な領域を取り扱うこの法には、タウヒード的な価値観が深く染み込んでいるのである。そしてこの具体的実践は、事実この世界の諸事象に、際立った共同体的特徴を作り上げている。ただしシャリフアとタウヒードの密接な関連性については、これまで明確な指摘はほとんど行なわれていない。未だに過去の負の遺産は、残されたままである。

## ウンマ

第三の問題点は、三極構造の最後の極である（ウンマン）の解釈である。ウンマとは原義では一般にあらゆる種類の共同体を指すが、イスラームの場合これだけでイスラーム共同体を意味している。と

ここでこの表現をめぐっては、いささか複雑な事情が存在している。つまりこの言葉には、イスラームが理想としていないいわゆる理想的な共同体と、具体的な現実の共同体の二つの意味が重ね合わさっており、これら二つの意味の関係を明らかにせずには、正しい理解が得られないのである。この問題を明らかにするためには、イスラーム世界の歴史的な説明が不可欠であるため、序章に必要と思われる限りでこの点について言及することにする。

正確にはウンマ・イスラミーヤと呼ばれるイスラームの共同体は、タウヒードの世界観の重要な帰結である徹底した民主主義の理念と、その具体的な実現のための実践的規範であるシャリーアの指示に従うことによつて、イスラームの登場当初具体的に理想的なかたちで実現された。預言者ムハンマド（マホメット）の時代から、正統四代カリフの統治に至る期間のイスラーム世界は、後のムスリムが見習うべき〈価値ある先例〉を数多く内に含んだ、理想的な時代であつた。正統四代カリフという呼称の〈正統〉とはアラビア語で〈リーダー〉、つまり正道を歩むという意味であるが、彼らにこのような名が冠されていることは、その統治がいかにイスラームの理念に叶つたものであつたかを示している。この時代は、為政者ばかりでなく、彼らにつき従う民衆もまた民主的協調の精神に溢れ、公私にわたつて博愛、相互扶助が実践され、調和ある共同体が実現された時代であつた。指導者に関して、当代最も敬虔で、識見のある人物をカリフ職に任命するという原則が貫かれ、適正な手続きを経て選任されたカリフたちは、すべてそれに相応しい人物であつた。しかし事情が変化を示すのは、そ

## 序 章

の後のウマイヤ朝（六六一～七五〇年）の時代からである。権力を掌中にしたこの王朝の初代カリフ、ムアーウイヤはカリフの地位を世襲制にしているが、これは当時の民主的な慣行を目の当たりにしてきた民衆にとつて、大きな墮落、腐敗であった。「ムアーウイヤはカリフの地位を、王権に墮落させてしまった」。当時の識者は、政治の世俗化についてこのような批判を浴びせ掛けている。

信者たちの長である為政者の世俗化は、イスラームの基本原則、タウヒードの原理からの逸脱であり、端的にいつて権威主義の復活、民主的精神からの逸脱を意味するものであった。権威主義の復活は、旧来のさまざまな遺制に息を吹き返らせ、共同体の活性、調和を損なっていく。イスラーム世界の長い歴史においては、数限りないイスラーム回帰運動の例が見られるが、事の当事者にとつてその主たる目的は、共同体内部におけるタウヒード的なものの回復、つまり民主的なものの再興を意図したものであった。この世界においては、政治的改革、共同体の民主性の向上は、タウヒード的なものを基軸として理解される。それからの逸脱は、権力による垂直的支配、条理化、囲い込みを強め、共同体の活性の源に他ならない社会的なエネルギーの水平的な配分の回路を分断し、閉ざすことにつながるのである。このように世俗化の問題が、タウヒードの原理の侵食を介して、権威主義の台頭、社会的水平性の無視へとつながる契機であると捉えられているところに、この世界の基本的な特徴がある。ここで問題なのは世俗化こそ、民主主義的社会構築の一里塚であるとする西欧起源の価値観と、タウヒード的なものの維持、復活こそ、そのための基本路線であるとするこの世界の伝統的価値観と、

相違である。この間の事情を正確に理解するには、ウンマとタウヒードの間の密接な関わりについての十分な認識が必要であるが、ここでは政治の民主化のための志向性の方向が完全に異なっているという点に注目すべきであろう。

ところでつとにウマイヤ朝の時代から始まった世俗化は、その後さまざまな領域、次元で徐々に進み、その結果一時は一枚岩を誇ったイスラーム共同体は、時を経るにしたがって分裂の度合いを強め、ついには西欧の植民地主義の餌食となり果てるほど弱体化しているのである。イスラーム世界が身を以て体験してきた、この理想的な過去と具体的な現実の間の落差は、ウンマの意味を上述のような二重構造にするのに十分であった。ウンマといえは通常具体的な共同体を指し、そこで多数派のムスリムが主導権を握っている場合、その社会は即イスラーム共同体と認識される。その意味では現実のイスラーム世界は、外部の観察者にとっては確かにイスラーム共同体そのものである。しかしその内実に目を向けた場合、イスラーム的なものは散逸し、その傾向は政治的支配の上層部において著しい。その結果この世界の内部の人々ととりわけ多くの敬虔な信者たちにとっては、上代の先例に比べて自分たちの社会が、すでにイスラームのウンマであるとはいえないと認識されることになる。確かにイスラーム世界と呼ばれる地域には、この教えに由来する伝統的なものが多く存在し、イスラーム的であることは事実である。ただし社会的意識の高い人々の目にとっては、これらの四散した遺物、遺制を統合し、自分たちの共同体を活性化させる元のもの、タウヒード的なものを欠く社会は、もは

## 序 章

やイスラーム的とはみなされえない。彼らがウンマとするものは、かつて歴史的に実現された理想の共同体であり、タウヒード的精神に満ち溢れたこの状態の回復こそが、現状打破を可能にするのである。理想的ウンマとその現状の対比は、当然のことながら退嬰に喘ぐこの世界の人々にとって最も重要な精神的、知的課題であるが、この課題の意味するところを正確に把握するためには、彼らが理想とするウンマが、いかなるものであるかについて探ることが不可欠である。そのためには先ず、ウンマとタウヒードの関連性についての理念的な検討が必須であり、次いでその具体的な様相を分析するためのシャリーアの歴史的、社会的評価が欠かせない。

以上の指摘は、イスラーム理解にとって最も基本的な三つの極のそれぞれについて、読者に準備段階として簡単にその概要を紹介すると同時に、それら中核的な要素の研究にいかなる欠損が存在しているか、同時にそれらの要素の相互関連性がいかに軽視されているか、という点を明らかにするものであった。この種の研究上の欠陥が放置されたまま、木を見て森を見ずのおびただしい言説が生産され、発信され続けているが、その内実がいかなるものであるかは、推して知るべしであろう。三極構造の内容、それにまつわる諸問題の詳細な説明は本文に譲るとして、以上の導入的な説明に依拠しながら、この辺りで先に述べた最も重要な問い、多くの人々の心を捉えてやまないイスラームの魅力について、簡単な分析を行なっておくことにしよう。おびただしく枝葉を広げているこの教えの、核心

的な部分を明らかにするには、三極構造とは別の観点からの分析が必要なのである。

## 聖典クルアーン

この教えにとつての基本的な典拠は、いうまでもなくクルアーンであるが、イスラームの魅力捉えるには、先ずこの啓典が誰にたいして呼びかけているかについて注目する必要がある。この書を前にする個々の読者にとつて、最も重要な箇所は、預言者ムハンマドに下された最初の短い啓示である。正式に編纂されたかたちでのこの啓典の第一章は、「讚えあれアッラー、よろず世の主」で始まる「開扉」の章である。神を賛嘆し、その導きに従う旨を述べたこの章は、イスラームを受け入れた者のあるべき基本的姿勢を示している点で、冒頭に置かれて然るべきものであることはいうまでもない。しかし一人の人間がいかにこの聖典と向かい合うか、つまりこの書をいかに理解し、その導きによつて現世を生きる支えとするかという根本の姿勢を示すものとして、一番初めに啓示された第九十六章の「凝血」の章の、以下に引く最初の教節はとりわけ重要である。「読め、創造を行ない、凝血から人間を創りたもうた汝の主の御名によつて。読め。汝の主はこよなく尊く、筆をもつて人間に未知の事柄を教えられた御方」。

ここで〈読む〉と訳されているアラビア語の動詞(قرأ)は、読むと同時に読誦するという意味を持つている。この二つの意味はそれぞれ異なったアスペクトと関わっているが、イスラームの啓典ク

## 序 章

ルアーンという呼称は、この語の動名詞形で「読みもの」、(「読誦のためのテキスト」という意味に解される。ところでこのような最初の啓示以降、クルアーンの内容は次々と下され、それが後にクルアーンに纏めあげられることになるが、この最初の数節は個々の信者がこの書といかに接すべきか、つまり典拠と読み手の関係を端的、かつ明快に示している点できわめて示唆的であるといえる。論旨の上から肝要なのはこの呼びかけが、直接一々の個人にたいして行なわれている点にある。神はそれぞれの人間を凝血から創り、「筆」という表現で要約されるような理性、ないしは理解力を授けられた。この類ない能力を与えられた人間は各自、それを充分に活用して先ずは啓典の内容を深く読み取り、その導きに従って未知の世界の認識に努めなければならない。天与の能力をもつてクルアーンの読解に努め、その指示に従って、自らを取り巻く世界と、それが湛える秘密を読み解く努力をせよと促されているのは、この書の読み手個人に他ならないのである。神と人との間にいかなる仲介者も置かないこの教えの、理性、ないしは理解力の行使に関する呼びかけの直接性は、すべての個人の主体性、能動性に強く訴え、それが個人の啓典理解を促し、その結果各人は周囲の世界にたいする認識の深まりを要請されるのである。ここで重要なのは、各人が促されている理解力の行使の対象が、最終的には「未知の事柄」という表現で示される「深い秘密を湛える世界すべてである」という点であろう。クルアーンが呼びかけているのが、先ずそれぞれの個人の知的イニシアティブに基づくこの書の読解であり、その読解の対象が啓示を媒介として全宇宙の未知の事柄、秘密に及んでいるという視野、展望の

広さこそ、この教えが人々の心を捉えて離さない最大の理由なのである。

〈読め〉というクルアーンの最初の指示は、この啓典が古代エジプトの神官たちに与えられた託宣のようなものとは、本質的に異なっていることを示している。選ばれた高位の神官に密かに告げられる神の言葉は、人々に解釈の余地を与えない絶対的な権威を持つ命令、指示として告げ知らされるばかりであった。しかしイスラームの啓典はむしろ、それぞれの個人に広範な主題に言及している原典についての自由な読解を促しているのである。そしてこの個人の知性行使の呼びかけは、その背後にそれをさらに強力にする要因を控えている。それは個々の人間が、現世における神の直接の代理人であるという、基本的な考えである。代理者を意味する〈ハリーファ〉というアラビア語は、日本語ではカリフと音写されるが、この言葉は常識的にはウマイヤ朝のカリフ、ヒシャームといった例のように、信者たちを統べる長を指す言葉として知られている。しかしイスラームにおいてはすべての人間が、理性の行使ゆえに現世における〈神のカリフ〉、神の直接の代理人とされており、信者たちの長の意味のカリフは、〈神の預言者のカリフ〉に過ぎず、その代理者性において前者は、後者より一段と高い位置を占めることになっている。個々の人間の神との関わりは最も優先的なものであり、いかなる権威者の介入をも寄せ付けぬという個人にたいする優遇は、それだけ人々に呼びかけを切実に受け止めさせる要因となっている。イスラームは先ず個人、統治の観点からすれば被統治者である民衆のものであり、統治者は二の次であるという上下関係の逆転も、この教えの磁性の一つである。

序 章

人間が何ゆえに（神の代理人）とされているかという点の詳細は、本文に譲ることにして、神の前でそれぞれの個人が、どのように位置づけられているかを検討することも、この教えの魅力を説明する重要なポイントであろう。この点を最もよく、簡潔に示しているのは、預言者ムハンマドが最後の巡礼（六三二年）の折に、信徒たちを前にして行なった「訣れわかれの説教」中の一節であろう。そこではすべての人間が父祖アダムアダムの末裔であり、したがって敬神の念を除き、あらゆる人々は平等であるという基本的な民主的宣言が行なわれているのである。イスラームの理念を簡潔に要約し、その教えのなるとるかを指示している点で、この説教は信者たちの間で特に尊重されているが、そのニュアンスを知るために関連部分だけを以下に簡単に紹介しておくことにする。

「皆の者よ、アッラーはこう仰せられている。へこれ人々よ、われら（神の言葉は複数で述べられる。引用者注）は一人の男と一人の女からお前たちを創り、互いに知り合うために部族、民族となした。まことにアッラーが最も賞でる者は、最も敬虔な者である。アラブが非アラブに優るとか、黒人が白人に、白人が黒人に優るといふことはない。優劣があるとすれば、それは敬神の念においてである。あらゆる人間は、土くれから創られたアダムアダムの裔である。そして見よ、ひとが誇りと思うものは、血筋、財産その他すべてが廃棄された」。

アラブの発想は、アフマド・アミンが指摘しているように、例えばギリシャ人のそれのように整然と構成されたものではなく、蜜を求める昆虫があちこち花を飛び回るように、主題が目まぐるしく

変わり、慣れない者には要旨が捉え難いのが特徴である。しかし右に挙げた一節から、主要な点は自ずと明らかであろう。一對の男女の末裔であるあらゆる人間は、それぞれ部族、民族に分かれているが、それは互いに敵対、敵視するためではない。神の前ですべての人間は、生まれの貴賤、富の多寡等にかかわらず、対等である。もしも優劣があるとすれば、それは敬神の念に基づいているが、それが問われるのは来世のことであり、現世においてひとは皆完全に平等なのである。それまで人類史上には、人間の平等を説く教えがいくつも存在してきた。しかしこれほど明確、かつ徹底的に民主的思想を述べている例は稀有であるといえよう。イスラームの魅力の原点は、万物の等位性を説くタウヒード論からも推測し得るように、一人の例外もなく人間に対等の地位を与えているところにある。当然のことながらこの平等観は、人間の基本的権利の擁護を伴っているが、七世紀の時点で「訣れの説教」は次のように明言しているのである。

「皆の者よ、お前たちの生命、財産、名誉は、主の御前に姿を現すまで、神聖にして侵すべからざるものである」。

今を去ること十四世紀の昔に行なわれた人権宣言は、民主的思想の常として、人々の強い支持を受けずにはいかなかった。個人の優先性、基本的人権の擁護という組み合わせは、当然各人の相互協調を要求せずにはいない。個人の優先は、決して個我の確立、個人の意思の野放しの解放を起点とする方向に進むものではなかった。共同体の編成に当たって、イスラームは最初からスピノザの思想、つま

序 章

り「考えを分かち合う者たちの協調こそ最も効果的」という路線の上にあった。社会生活において「わたし」は限りなく他者に開かれていたが、預言者ムハンマドの最後の説教は、共同体の中での個人の採るべき基本姿勢を、以下のように簡潔に述べている。

「皆の者よ、あらゆるムスリムはたがい兄弟（姉妹）である。ムスリムはすべて兄弟の絆で結ばれている。お前たちの奴隷についても、自分たちが口にするのと同じ食物を与え、自分たちが身に纏うものと同じ着物を与えよ」。

すべてのムスリムはたがい兄弟姉妹であるという認識は、個人の尊厳、人権の擁護の思想と対になって現れるのが常であるが、平等の意識が博愛へとつながる事情については、贅言を要するまでもないであろう。ここで明らかにしておかなくてはならないのは、十八世紀の後半にフランスでなされた〈自由、平等、博愛〉の理念に基づく人権宣言に先立つこと千年余の時点で、すでにアラビア半島の一角で別種の人権宣言が行なわれていたという事実である。唯一なる神への信仰を基礎にしているか、人間中心主義であるかという基本的骨格に相違はあるものの、人間のレヴェルにおいて、民主主義的なものが保持していなければならないものは、ほとんど七世紀の時点で完備されていたのである。神を媒介とする民主主義と、人間中心のそれとの比較は本文の任務であるが、先ずはこのような個人の優先性に始まって、豊かな共同体構築の理念までを射程に入れたこの教えの基本的な主張が、人々の心を捉えて離さない点であることを指摘した。

## イスラームの社会形成の歴史

### 預言者ムハンマドと正統カリフの時代

以上でイスラームという教えの核をなす三極構造の概要と、その点に関する研究上の不備を指摘した後、この教えの魅力、ないしは説得力の源である民主的な性格について略述した。これによって七世紀の初めにアラビア半島の一角に登場したイスラームの教えが、何ゆえに短期間に勢力を拡大して、一大文明圏を作り上げることが可能であったか、またその後衰退の道を辿りながらも、未だに潜在的な力を維持し続けている理由は何か、といった事情の一端を明かしえたはずである。それに次いで検討する必要があるのは、宗教としてのイスラームとその文化、社会的伝統との関わりであり、とりわけこの伝統形成に当たって大いに貢献したイスラーム法としてのシャリーアの役割である。在来の研究は、イスラームを取り上げる場合もつばらその宗教的側面のみを強調し、それとイスラーム世界の社会、ないし歴史の関わりについては不問に付してきた。また歴史の研究に当たっては、さまざまな外面的史実のみを取り上げて、それらをそのように現象させているものについての配慮を怠ってきた。しかしイスラームという教えはそもそも、個人の意識を神との関わりにおいて強調している

## 序 章

ものの、共同体的な性格を色濃く持つている宗教であり、現世における人々の生き様に深く関与している。その格好な例がイスラーム法の存在であろう。キリスト教や、仏教は、信者たちに具体的な生活に関係するキリスト教法、仏教法といった法的規範をもっていない。しかしイスラームには実定法的な規範が存在しているという事実は、それ自体でこの教えが社会のありよう、歴史の展開の流儀と深く関わっていることを端的に示唆するものといえよう。世界観としてのタウヒード、法としてのシャリーアとウンマの共同体は、互いに密接に関連しながら機能しているのであり、これが理想的か、具体的かのいかに問わずウンマの内実から、伝統の特質の形成に深く関与していることは疑いないのである。それは当然歴史の展開の特殊性とも密接に関わっているのである。

周知のようにイスラームの預言者、ムハンマドは世に容れられた預言者であり、彼の教えの成功は、その原則に基づく具体的な共同体の成立と手を携えていた。通常ある種の思想、ないしイデオロギーが求める理想的な社会像は、**経典、政治的マニフェスト**といったかたちを採って、**理念的、抽象的に**描き出される。しかしイスラームの場合はそれと異なり、登場初期に具体的な歴史の中でそれを実現しているのである。したがって正統四代カリフの時代までの歴史は、多くの信者たちによって、とりわけスンニー派の人々にとって、**批判の余地のない神聖なものとして崇められているのである**。具体的に実現された神聖史の内実については、**なお言及すべき多くの事柄がある**。しかしここではそれを要約して、共同体内部の公私にわたるタウヒード的な精神の充実と規定しておくことにしよう。ここ

で問題なのは、これからの逸脱がいかなる過程を経て招来したか、同時にその存続がこの世界の伝統の形成にどのような貢献をしたかという、タウヒードをめぐる力の対抗、拮抗関係の分析である。すでに述べたようにイスラーム世界においては、ごく初期から権力の中枢部の世俗化が始まっていた。この世俗化は、この世界を統合させてきたタウヒードの精神からの逸脱を助長し、政治的な分裂、それに伴う共同体の弱体化をもたらさずにはいなかった。

しかしこれは事の半面であり、支配の中枢、ないしは政治的上層部における世俗化が進行する傍ら、そのすぐ下では広範な民衆の手によって、共同体の活性を維持するさまざまな努力が続けられていた。ドウルーズの卓抜な表現を借りれば、支配の上層部によって試みられる、〈囲い込み空間〉Ⅱ〈溝つき空間〉の論理による権威主義的な条理化にたいして、底辺の民衆は、タウヒードの世界観に支えられた〈滑らかな空間〉の論理によって、権力の構築する境界線の囲みの間隙を縫って、巧みに逃走する術を習得していった。この世界における世俗化の進行は、当初一枚岩であったイスラーム共同体を地域的に分裂させると同時に、その内部のイスラーム性を特殊な流儀で配分する契機を作っていた。権力の外部への逃走が不可能であった民衆は、共同体の内部において権力から自衛する手段を講じているが、それに大きく与っているのが、共同体の自律性を法的に支えているイスラーム法としてのシャリーアなのである。そのような意味でシャリーアは、欧米のオリエンタリストの説くところとは異なり、この地域における文化、社会的な伝統の形成と密接に関わっているのである。イスラーム世界の

過去と現在、ひいては理想的なウンマとその現状の乖離の間には何が存在しているのか、ここで行なわれているタウヒード性と世俗性との拮抗は、今なお継続中のドラマであるが、その本性を知り、同時にその帰趨を占うためには、そこで主役を演じてきたシャリーアを指標にして、葛藤の歴史的経過を回顧する必要があるのである。

### ウマイヤ朝・アッバース朝の時代

登場当初一大帝国を築き上げたイスラーム共同体は、この帝国をすべて自前のイスラーム的原理に基づいて運営してきた。一昔前には荒野で家畜を養う遊牧民であつたり、遠隔貿易に携わる隊商の商人だつたりした人々にとつて、イスラームの理念に基づいて短時日のうちに成就した大帝国の運営は、新たな創意、工夫を要する事柄であつた。大規模な版図を運営するためには、統治のための大掛かりな官僚機構が不可欠である。そしてこのような大型組織の維持、運営に当たっては強力な権力が必要であり、例えばウマイヤ朝を擁護する人々の間には、この王朝から始まつたカリフ職の世襲化も、帝国運営のためにやむを得ぬことであつたとする見解もある。ただしそもそも官僚機構はその本性上、上下に貫徹される垂直的な権力構造の強化を志向するものであり、このような支配者の上からの囲い込みは、タウヒード的な力の水平的な配分に慣れ親しんできた民衆にとつては、唾棄すべきものに他ならなかつた。九十年の寿命をもつたウマイヤ朝は、その間イベリア半島の攻略、中央アジアへの進

出という目覚しい版図の拡大を達成している。しかし同時にこの王朝の歴史を通読すれば明らかであるが、絶えず内部の反乱、抗争の鎮圧に大童だったのである。王朝の世俗化と、その下でのイスラーム的なものの強化という相矛盾した傾向は、それぞれ異なった方向に掃け口を見出していたのである。

もっぱら政治的な術策、巧妙さをもつてカリフの地位についたムアーウイヤは、その権勢を自分の一統に遺贈するために、評判の芳しくない息子を後釜に据えたが、カリフの世襲化に象徴されるウマイヤ朝の世俗化が、一枚岩のイスラーム共同体に何をもたらしたかを検討することは、その後の世俗化の経過を推量するためにきわめて有益であろう。イスラームは、長らく激しい部族対立に明け暮れたアラビア半島の住民たちを、タウヒードの精神の適用を通じて克服することができた。しかしウマイヤ朝の権威主義は、踏襲したイスラーム的なものを介して勢力の拡大に成功はしているものの、内部にさまざまな対立を生み出しているのである。

その第一は、対立する宗教的分派の登場である。徹底した原則主義者であり、あらゆる世俗的傾向を排して、正統カリフ、アリーの治世に一派をなしたハワーリジュ派は、イスラーム世界で最初の分派であるが、彼らはウマイヤ朝の世俗性を指弾して、何度もこの王朝にたいして激しい反乱を企てている。またシーア派の登場も、この王朝にたいする反発に深い根を持つものである。第二は、地域主義の台頭である。シリアのダマスカスに都を置くムアーウイヤは、王朝の設立以前にイラクに本拠を置いたアリーと敵対関係にあった。そのためイラクの民衆はウマイヤ朝に敵対的であり、したがっ

## 序 章

てイラクの出身者は王朝から遠ざけられ、地域的対立が強められずにはいかなかった。第三は、部族主義の復活である。ウマイヤ朝は、当然有力な支持者を周囲に集める必要があつたが、次第に宮廷内部において南アラビアの出身者と北アラビア出身者の間で、激しい派閥争いが生ずることになる。これが長期化することによって王朝内部の力を削ぎ、結局はその崩壊の遠因となつている。そして第四は、非アラブとの関係の悪化である。イスラームは、すべてのムスリムは兄弟姉妹であり、神の前では平等であるということを原則としている。したがつて版図の拡大と共に、新しい非アラブの改宗者の数も増えていく。ところでウマイヤ朝はアラブ中心主義で、新参のムスリムにたいして十分な配慮を行なわなかつた。彼らを要職につけないことはもちろんのこと、北アフリカでは、ムスリムに課すことのできない人头税を取り立てるなど、差別的政策を強行して大反乱に見舞われている。このような姿勢を以てしては、次第に数を増す非アラブ・ムスリムからの支持を期待しえず、結局この王朝は崩壊の憂き目に見舞われることになる。

具体的なウマイヤ朝の例が示しているように、世俗的な欲望の結果獲得された権力は、イスラームが克服し、乗り越えてきたものを忽ちのうちに復活させてしまった。先に挙げた宗教的分派の登場、地域主義、部族主義の復活、非アラブの差別等は、すべてイスラームが強く戒めてきたところのものである。この種の墮落、退行に対しては、対立する分派だけではなく、多くの知識人たちがさまざまなかたちで反発を示したが、とりわけ法学者たちの王朝にたいする徹底的な非協力の態度は、その顕

著な一例である。ウマイヤ朝の権勢欲にたいする民衆の反発は激しいもので、王朝崩壊の後には宗教心篤く、有徳な言行で知られたウマル二世の場合を除き、歴代カリフの墓が暴かれていることからその度合いを窺い知ることができる。そしてこの王朝を倒すことになるアッバース朝は、イランの奥地ホラーサーンから、非アラブ・ムスリムの支持を取り付けて開始された、イスラーム回帰の運動であった。この世界ではイスラーム性と世俗性は、左右に揺れ動く振り子の振動のように、勢いを競い合っているのである。

ウマイヤ朝の後を継いだアッバース朝は、それまでのアラブの王朝をムスリムの王朝に変えたといわれるように、新たな改宗者たち、とりわけペルシヤ系、トルコ系の人材を積極的に登用した。同時に初期のカリフたちは学芸を奨励し、特にそれまで地域間の差異が大きかった法制度を整備するため、進んで在野の法学者の協力を仰いだ。その結果この王朝はその初期に、イスラーム史の黄金時代と評されるほどの文化的興隆を示している。ウマイヤ朝という準備期間を経て、イスラーム文化は、依然として政治の世俗化の波に浸されながらも、他方では成熟の度合いを強めているのである。ただしこの王朝も、当初のイスラーム性回復のスローガンにもかかわらず、これまでのウマイヤ朝の惰性を完全に絶つことはできなかった。この王朝は、権力維持のためにいつそうの中央集権化を図り、行政面での効率を上げるために、官僚組織の中核に有能なペルシヤ系の人材を登用する。しかし内訌、対立に走りやすいアラブを遠ざけ、宮廷で絶対権力を振るう孤独なカリフたちは、その結果自分たち

を取り巻くペルシヤ系高官たちの圧力に脅やかされることになる。エリート官僚群の脅威を撥ね退けるために宮廷が採った策は、対抗勢力としてのトルコ系軍人たちの抜擢であった。しかしほどなくして彼らも宮廷にたいし、ペルシヤ系官僚がもたらしたのと同様の圧力を加えることになる。軍人のもたらす脅威は、官僚のそれよりもさらに直接的であり、王朝末期ともなると名ばかりのカリフの多くが、補佐役の軍人の手にかかって次々と暗殺されているのである。このような内部の混乱を抱えて弱体化した王朝は、周辺部から次々と小王朝の独立を許し、遂に十三世紀の中葉には急遽東から姿を現したモンゴル勢によつて滅ぼされている。このおりにアッバース朝最後のカリフも命を絶たれているが、それ以降イスラーム世界には実質的なカリフ、つまり宗教の長は存在しないことになる。

### 為政者とシャリーア

以上のような経過を辿つたカリフの歴史の要点を、ここで簡単に纏めておくことにしよう。当初カリフは、イスラーム共同体の教権と政権を共に統べる存在であった。初期の四代正統カリフの時代までは、歴代カリフは公私にわたつてタウヒード性を尊重した為政を施し、内部に多少の矛盾を抱えながらも、民衆の強い支持を享受していた。しかしウマイヤ朝になるとカリフ職の世襲制に見られるように、政治的権力の所有者としての側面が濃厚になり、民衆の反感が強まっていく。アッバース朝にしても事態は変わらず、政権維持の試みが支持者獲得のための世俗的配慮の増大につながり、そのよ

うな傾向が却って自らの政治的権力の衰退を招く結果となつてゐる。アッバース朝の中期以降は、カリフは教権のみの長であり、実質的な政治的権力を握るアミール、ないしはスルターンと相携えて、二人で共同体の頂点に立つようになった。イブン・ハルドゥーンがいう、《双子の支配》の時代である。ところでこの時代の政権の実力者たち（ここでは政治的支配者を意味するスルターンという表現を用いておく）は、多くの対抗勢力と覇を競わねばならなかったため、権力の獲得、維持のためには手段を選ばない傾向があつた。このような実情を批判して、十一世紀の法学者アル＝マーワルディーは、『統治の諸規則』という書を著し、政治的支配のあるべき姿を述べている。この書はオリエンタリストの観点からすれば、理想に走りすぎ、現状から遠ざかること著しい、という評価が一般的である。しかし私見によれば、イスラーム的な統治をめぐる多くの先例に基づいて書かれているこの論考は、法的に体系化されているという訳ではないが、政治をめぐるシャリーアの書とみなされうるものである。イスラームのシャリーアは、すべての分野に適用されるものであり、政治も決して例外ではないのである。このような意味で理想的な時代のカリフ自身が実践し、同時にムスリムが期待した政治のありようが反映されているこの書は、そのような観点から再評価されて然るべきであろう。

イスラームの登場からアッバース朝の崩壊までは、とにかく教権の長であるカリフが存在していた時代である。ところでこの地位が消滅した後に、イスラームは何によつて代表され、擁護されるようになったのであろうか。十三世紀以降イスラーム世界は分裂し、諸王朝が乱立することになるが、政

## 序 章

治的支配者の中には自ら敢えてイスラームの長と名乗り出る者は、オスマン朝の場合を除いてほとんどいなかった。またオスマン朝のスルターンがカリフを自称することもあつたが、イスラーム世界の人々はそのイスラーム性について判断を留保し、それを受け入れてはいないのである。そのような状況において人々は、政治の世俗化を受け入れざるをえない立場に立たされたが、スルターンがシャリーア、つまりイスラーム法を国法とする限りで、彼の政体のイスラーム性を認めるといふ条件つきで、その為政を受け入れているのである。表現を変えるならば、カリフという人格に代わつて、イスラームの具体的実践に関わるシャリーア、つまり法が、イスラームを代表し、それを擁護する役割を担うようになったのである。この際重要なのは十三世紀から二十世紀初頭に至るまで、王朝は目まぐるしく交代したが、それらの国家の基本的な法であるシャリーアの地位は不変であつたといふ事実である。このような事実と関連して指摘しておくべきは、〈王朝〉、つまり伝統的な〈くに〉を意味するアラビア語の表現の特殊性である。アラビア語で王朝は〈ダウラ〉といわれるが、これは元来有為転変、移ろい易いものを意味している。欧米語ならばレヴォリューション、つまり変化、革命を意味するようなくにに關するこの表現は、政治的権力者は変わつても、シャリーアの地位は不動であるといふ、イスラーム世界の実態、それに基礎を置く政治的意識を端的に反映しているといふのであろう。

シャリーアは、ことほど左様にイスラーム世界における歴史的展開に大きな役割を果たし続けてきた。政治的支配者とは、実にしばしば権威主義的で、自分の意思を他に強制することを憚らない。明

確な法の存在は、そのような為政者の専断にとつては不都合極まりないものである。したがって強力な支配者は、もしも可能な場合、このような法を反古にすることを試みたはずである。しかしシャリーアに支えられた草の根のムスリムの力は、権力者のそのような試みを遂に不可能にしてきたのである。彼らは知識人、とりわけシャリーアに通じた法学者を先頭に立てて、支配者たちの世俗性と対抗し続けてきた。彼らの要求は、当然国政に反映されぬ場合こそ多々あつたが、ことシャリーアの擁護となると侮り難い力を發揮し続けてきたのである。ここで留意すべきはこのような政治的指導者と、民衆に支持されたイスラーム法との、並行関係と、それによつてもたらされる力の配分である。移ろい易い（くに）の勢力維持のために汲々とする為政者は、もっぱら外敵からの自国の防衛、国内の治安の維持等に専念してきた。反面イスラーム法は、とりわけ草の根の家族、親族、隣人に始まる小共同体の活性化、調和の維持に大きな関心を払っている。したがって長らく持続された両者の並行関係は、国政のレヴェルと、その直ぐ下のレヴェルとの間の、社会的役割分担の相違というかたちで現れることになった。

### 近現代とシャリーア

近現代におけるこの地域のくにの単位の脆弱さは、すでに常識の範囲の問題であろう。ただしそれに反して、というよりはそれに反比例して、小共同体の連帯、それを可能にする民衆レヴェルの制度、

## 序 章

慣習の安定度は強化されているといいうる程のものなのである。シャリーアを基礎にもつ小共同体の連帯の力強さは、この地域の人々の強い相互扶助の精神に明らかである。しかしこの点で特筆すべきは、社会的福利、厚生の実態である。この地域では伝統的に公共建築の建設や維持は、学校、病院等を含め、国家の助けを待つまでもなく、概ね民衆のイニシアティブで行なわれてきた。目まぐるしく移り変わる為政者の下で、この地の民衆は自らの生活を防衛するために、国家や為政者の恩恵を特に期待しなかつた。小共同体レヴェルでの福祉、安寧は、自分たちの手で行なうという慣習は深く彼らの生活に根付いているが、これを涵養したのは他ならぬシャリーアなのである。小共同体の自衛は、人々の生活態度に根ざしているだけでなく、さまざまな社会的慣習、制度等にも結晶していった。例えば都市のランダムな居住空間、定価経済ではないバザールの取引等、同一律をもつては秤量し難いシステムは、この地の至るところに見出されるが、この乱雑さこそこの地の民衆のしたたかな生き様の表現なのである。権力の囲い込みは、もっぱら同一律の活用によって実施される。上からの権力による条里化に抵抗するには、もっぱら差異性を擁護し、それを活用するにしくはない。民衆はランダムな生活空間に生き、経済行為を実践することによって、簡単に権力の介入を許さない、自己組織的な共同体運営のスタイルを作り上げているのだが、この支えとなつているのもタウヒード性を内に宿したシャリーアなのである。

このような状況は、植民地主義の到来と共にさらに一段の変化を迫られることになる。法の側面に

焦点を当てるならば、それは多くの国々における西欧法の導入である。イスラーム世界においては、それまでいかなる事態が生じたとしても、すべてイスラーム的なもので対処してきた。しかしこの世界の政治力の衰退と、国際的なネーション・ステートの国家観の隆盛に伴い、公法の分野で西欧法を採用する国々が増え続けることになった。ただしここで看過されてならないのは、まさに西欧の世紀であり、植民地主義華やかなりし時代においてすら、民衆の価値観、生き様と深く関わる私法の分野、正確には〈私的関係法〉の分野は、依然としてイスラーム法が踏襲されたままであるという事実である。次第に手足をもち、もはや私法の領域にしか残存していないシャリーアの衰退ぶりは、長らく外部の観察者をして、イスラームを過去のものだと判断させるに充分であった。そのような状況で突然のように誕生したのが、イランのイスラーム共和国である。新生イランは、国教をイスラームとし、国法をイスラーム法とするとして国民に信任投票を行なったが、実に九〇パーセントの賛成を得ている。イスラーム世界の歴史、伝統に関して眼に一丁字もない人々にとって、これはまさに衝撃的な事件であったが、この世界においてはイスラームへの回帰が、しばしば社会的民主性、民衆の自律性回復の試みであることを知る者にとっては、特に新奇な出来事でもない。とにかく過去の理想的な先例に倣うといった、原点回帰主義の改革を志向する人々は、イスラーム法を国法とするこの革命によって、一挙に七百年も理想の点に向かって回帰しているのである。

以上でイスラーム世界における政治的变化を、シャリーアの位置の検討と絡めながら分析した。当

## 序 章

初帝国内の公私すべてにわたる事柄を処理する道具であったシャリーアが、政治権力の変化と共に機能の範囲を狭めていく歴史的過程については、上述の概要で概ね理解されえたはずである。しかしここで再度検討しておかなければならないのは、上述のような過程の分析が、歴史的な状況によって決定付けられた、イスラーム法としてのシャリーアの軌跡だけを対象とするものであり、現在でも十数億の人々の意識的な営みと関わっているシャリーアの力、可能性はまったく考慮の外にあるという点である。イスラーム世界の認識、判断に関しては外部の観察者の推量と、内部の当事者たちの自己評価の間に、おびただしい相違が認められるのは周知のことである。それにはさまざまな理由が存在するが、その最大のもは、この信者たちすべてに関わるシャリーアの重みにたいする理解に纏わっているであろう。

イスラーム世界は、他のすべての文明圏と同様に、独自の世界観、伝統をもっている。これまでも、そして今もなお、欧米化こそ進歩の千里塚とする傾向は濃厚であるが、ここに来てようやく文化的多元性についての関心が高まりつつあるように思われる。現行のグローバリゼーションは、世界の均等な発展、向上をうたい文句にしているが、この均等性を求めるスローガンは、実際には大掛かりな詐術を含んではいないであろうか。均等という名のもとに、差別的なものを均質性の中に困い込み、それによって同一律の支配を強化するといった、危うい普遍化の大波が、政治や経済の領域に襲い掛かっ

ている。このような単純な普遍化は、結局のところ人間のサステナビリティそのものを危うくするものであるが、その徴候はすでに現代文明のあちこちに顕著である。それぞれの文明圏に属する人々は、直線的な進歩、発展の道筋に疑問を呈し、自ら固有のものに基づいた行方の模索を開始している。イスラーム回帰の現象も、単に欧米の政治的権力、価値観にたいする反抗としてではなく、そのような自己の文化、社会的なアイデンティティーの模索と解釈した場合、文明間の挑戦と反抗といった対立の様相ではなく、開示と融合の協調的なアスペクトで捉えられるはずである。そして対立を協調へと転化させる最も重要な要因は、いうまでもなく他者についての正確な認識の獲得なのである。何はとまれエヴェレストが存在するように、イスラーム世界は確実に存在している。山があるから登るといった登山家のように、われわれはこの世界に足を踏み入れる必要があるが、そのためには正しいルートが発見、調査が不可欠である。本文でわれわれが取り扱う主題は、概ね未知のものであると同時に複雑、多岐にわたっている。したがって登頂を前に上述のような予備的説明を行なった。

SAMPLE  
ShoshiShinshu.com

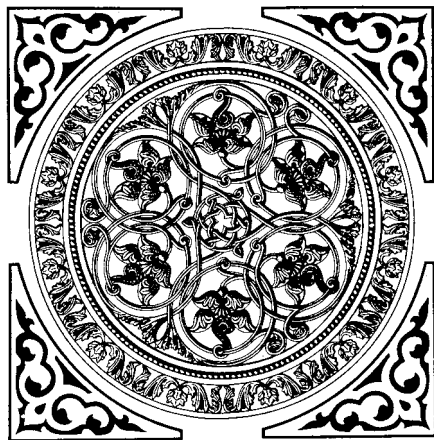
第一章

タウヒード

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

イスラームの世界観

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com



カイロにあるマムルーク朝アミールのマスジドを飾る唐草模様(14世紀)

## 第一章 タウヒード

ある特定の文化、文明の本性、特質を考察するに当たっては、それを構成する基本的な諸要素について、正確な認識を持つことが不可欠である。文化、文明といつても歴史的にどの時代を、地理的にどの地域を取り上げるかによつて、その構成要素の分節化の度合は異なる。例えば冷たい文化、熱い文化といった区別は、比較論的な視点からいつそう厳密になされるべきであろうが、実際には熱い文化を、冷たい文化同然に扱うという態度は、これまでの欧米の地域研究が陥りがちな落とし穴であつた。異質の文明は、野蛮であるか、発展途上であるという自文化中心主義は、とりわけ非西欧圏を取り扱う地域研究に色濃いが、その種の弊害を取り除くためには、従来 of 視野の偏向、ないしは狭窄の実態を点検し、それを矯正する努力が必要とされるであろう。在来 of 研究が何を見、何を見損じてきたかという点の確認なしには、意味ある知的探求は期待しえないであろう。すでに序章において指摘したところであるが、イスラーム、ないしはイスラーム世界の研究において、最も深刻な問題点として要約されるのは、以下の二点である。その第一は、それを理解するための最も重要な問題が、ほとんど故意に無視されていることである。第二は、それによつて、本来統合的な、もしくはアナログ的な性格を持つ対象を、部分的、デジタル的にしか分析してこなかつたという点である。

文明はそれ自体統合的なものであり、それを構成する諸要素の有機的相互関連性を把握せずには、理解しえないことは当然である。さらにイスラームの文化、文明は、他と比較して本性上よりいつそう統合的、有機的であるが、これまでわれわれは、この教え、この地域の解明に当たつて、そこに宿

されている思想、法、政治、経済、文化、社会等の諸側面を互いに通貫、交流させるような説明に出会うことがなかった。思想は思想、法は法といった具合に、構成要素はそれぞれ単独に、独立した柱として取り上げられるばかりで、その上しばしばその意義、機能までが否定的な評価を受けるというのが実情であったが、この種の事態の改変なくしては、偽りの言説の根拠を断ち、今後の研究の正しい方向付けを行なうことは不可能であろう。あらゆる観察の対象は、その本性を最もよく認識するための、固有の切り口を備えている。イスラームを知るための近道は、タウヒードの観法を知ることにあることは、古来この世界の人々によってしばしば指摘されているが、それに関する意義深い研究は、筆者の知る限りではほとんど存在しない。ただし「イスラームとはタウヒードの教えである」と、現地の識者が指摘するようにその世界観は、先行する他の二つの啓示宗教とイスラームの相違を明示するだけでなく、この教えそのものの本性、ならびにそれが備えている文化的、社会的ネットワークの構造を理解するための最良の鍵なのである。観点を変えらるならば、イスラームによるタウヒード観の徹底は、自然、ないしは現実世界と人間との対応を、先行の姉妹宗教のそれとは極めて異なったものとし、それが文化、社会的な諸要素を同心円の土台の上に据えるという、イスラーム文化の基本的な特徴を創り上げているのである。

第一章 タウヒード

タウヒードとは何か

等位性、差異性、関係性の三幅対

いよいよ本章において、タウヒードに関する各論に入ることになるが、それに先立ちこの立場が、他のどのような要素と結びついていかなる結果を産出するかについて、予め論議が進行するさいの大まかな枠組みについて概観しておくことにする。しばしば各論への固執は、読者に全体像に関する展望を見失わせがちだからである。

筆者はこれまでさまざまな機会に、イスラームの基本的な世界観であるタウヒードが、神の唯一性と同時に、存在界の特殊な唯一性を主張していると述べてきた。それによれば世界のあらゆる存在者、つまり宇宙の森羅万象は、一々が存在として等位にあり、それぞれ差別的でありながら、しかもすべてが他と関連し合って存在するものと認識されるのである。タウヒードが提示するこのようなすべての存在者の等位性、差異性、関係性という諸概念の三幅対は、当然いくつかの重要な結果をもたらさずにはいない。それは先ず、後に詳述する自然についての普遍的な解釈であり、その結果としての平等主義的な人間観である。タウヒードからもたらされる三つの原則の組み合わせは、先ずは現実世界